

## 2. 出生から採血までに要した日数

①0～4日, 52件(0.05%), ②5～7日, 85,251件(89.1%), ③8～14日, 8,274件(8.6%), ④15～30日, 1,322件(1.4%), ⑤31日以上, 833件(0.9%)であった。

## 3. 採血から受付けまでに要した日数

①0～3日, 54,132件(56.5%), ②4～7日, 35,332件(36.9%), ③8～14日, 5,551件(5.8%), ④15～30日, 661件(0.7%), ⑤31日以上, 51件(0.05%)であった。

## 4. 出生から結果判定までに要した日数

①15日以内, 71,050件(74.2%), ②16～20日, 17,708件(18.5%), ③21～25日, 3,446件, ④26～30日, 962件(1.0%), ⑤31日以上, 2,566件(2.7%)であった。

## 5. 出生より再検, 精査を依頼するまでに要した日数

再検, 精査を依頼した件数は155件で, 全体の0.16%にあたる。

①15日以内, 19件(12.3%), ②16～20日, 86件(55.5%), ③21～25日, 35件(22.6%), ④26～30日, 7件(4.5%), ⑤31日以上, 8件(5.2%)であった。

## 考察と結論

検体を受付けてから一次スクリーニングの結果判定までに要する日数は流れ作業であり, これは6～8日である。生後5～7日に採血し, 郵送に2日かかったとして, 最大限17日, 若干の余裕をみても生後20日以内には一次スクリーニングの結果が報告できる。現在20日以内に一次の結果が報告できているのは全体の92.7%であるが, クレチン症の疑いのある155件のうちでは67.8%であった。

結果判定までに要する日数が多くなる原因の主なものは, 採血から受付けまで, すなわち郵送の段階であり, この点の啓蒙が必要である。さらに, 採血が生後5～7日に行われるよう呼びかけることも大切である。

## マス・スクリーニングで発見されたクレチン症, 乳児一過性高TSH血症, 一過性甲状腺機能低下症の臨床経過

浜松医科大学小児科 五十嵐良雄  
竹廣 晃

我々が現在治療ないし経過観察を行っているマス・スクリーニングで高TSH血症を指摘された乳児一過性高TSH血症3例, 異所性甲状腺性クレチン症2例, 新生児一過性甲状腺機能低下症1例の臨床経過について報告する。初診時の検査所見等については昨年度報告した。

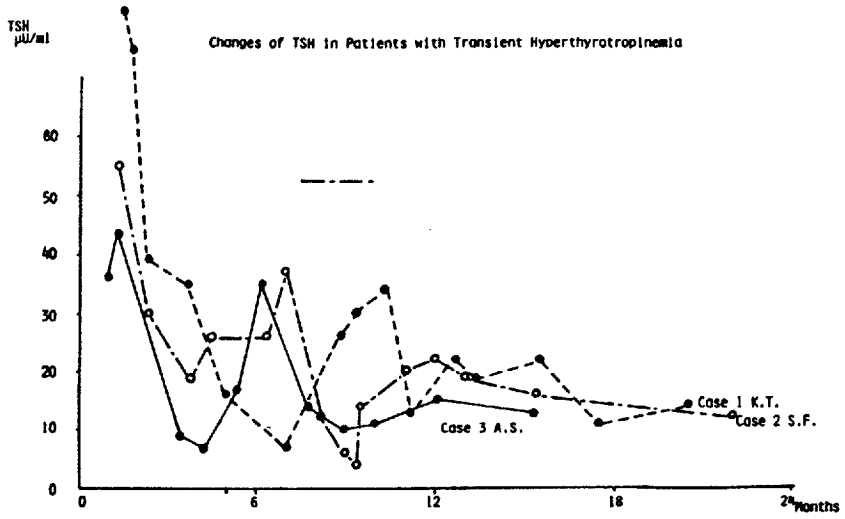
乳児一過性高 TSH 血症では図 1 の如く、TSH 値は動揺を示しながら低下傾向にあるが、1才5カ月～2才時でも $13\sim 16\mu\text{U/ml}$ と正常化していない。3～4ヶ月時臨床的に甲状腺機能低下症状をみとめなかったが  $T_4\ 6.5\mu\text{g/dl}$ 、 $T_3\text{-RIA}\ 50\text{ng/ml}$ と低下を示した1例を除き経過中甲状腺ホルモン値は正常域内にあった。身長、体重も $\pm\sigma$ 以内にあり、津守式質問紙による DQ も100前後と正常でありその運動、探索、操作、社会、食事、理解、言語などの発達輪郭も大きな偏りを認めていない。

初診時機能低下症状を示さず、血中甲状腺ホルモン値が正常であり4カ月半より治療を開始した軽症クレチン症および初診時よりクレチン症と診断し、6週目より治療を開始した症例ともに、身長、体重は $\pm\sigma$ 以内にあり、DQ も117～124と正常であり、その発達輪郭も異常を認めなかった。(図 2)

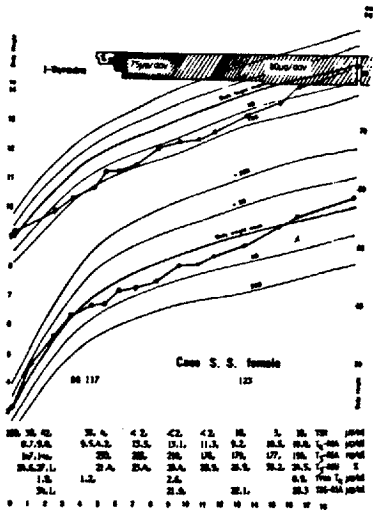
新生児一過性甲状腺機能低下症の症例は、11カ月時甲状腺シンチを施行し正常甲状腺像を得たので治療を中止したが、新生児期 IRDS を合併し、軽症水頭症、軽症脳性麻痺を合併しているにもかかわらず、その身体発育は比較的順調であり、精神運動発達でも大きな異常を認めない(図 3)。

マス・スクリーニングにて高 TSH 血症を指摘された症例については、血中甲状腺ホルモンの測定だけでなく、その身体発育、精神運動発達や骨成熟の評価などを適切に行い、症例によっては甲状腺ホルモンの投与あるいは甲状腺シンチなどを躊躇せずに行うべきと考える。

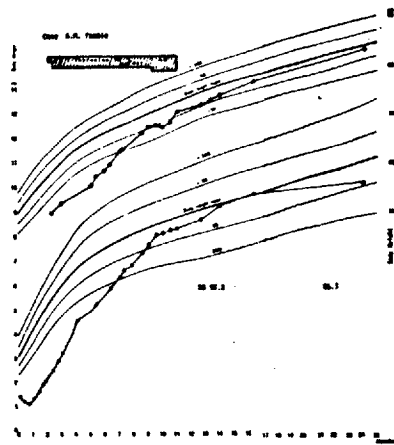
☒ 1



☒ 2



☒ 3





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



我々が現在治療ないし経過観察を行っているマス・クリーニングで高 TSH 血症を指摘された乳児一過性高 TSH 血症 3 例, 異所性甲状腺性クレチン症 2 例, 新生児一過性甲状腺機能低下症 1 例の臨床経過について報告する。初診時の検査所見等については昨年度報告した。